

2020_2021 JES 課題研究 研究計画書 (様式例)

<p>研究テーマ</p>	<p>「エビデンスベーストの英語の読み書きー小学校外国語科を支える 10 回パッケージ文字指導の提案ー」</p>
<p>研究責任者 所属・連絡先</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・氏名 柏木賀津子 (かしわぎかづこ) (大阪教育大学) ・住所：〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀町 4-88 ・電話：090 (9111) 5328 (携帯) ・FAX： ・Email：kashiwag@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
<p>研究担当者・所属</p>	<p>例 代表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柏木賀津子 (かしわぎかづこ) (大阪教育大学) ・鈴木渉 (すずきわたる) (宮城教育大学) ・山下桂世子 (やましたかよこ) (Ashbrook 小学校 英国) ・北野ゆき (守口市さつき学園)

(1) 研究の概要

本研究では、「英語の音と文字の綴り」に関する理論を統合的にまとめた上で、日本語を母語とする児童が、初めての絵本を読むようになるまでの「15分×10回」の活動を開発し（英語の読み書き 10 回パッケージ：10P）、WEB で配信することである。2 つの公立小学校での指導効果は「10P チャレンジクイズ」を作成し事前事後比較により分析する。フォニックス指導の様々な異なりや教科書ごとの違いを超えて、担任が学級で取り組める文字指導の手順と方法を提案したい。研究対象は、日本（11-12 歳）とイギリス（読みの指導が始まる様子の把握：5-7 歳）とする。内容は、1、英語の音声と意味の繋がり（form-meaning connections）の検証、2、英語の読みのレディネス（reading readiness）の検証で、①と②の相関や、①の程度による②の違い、10P 指導の浸透と児童の興味付け等を探る。「初めてのデコーディング絵本」を作成し、日本の児童が自立して英語を読むようになる指導方法を、得られたエビデンスと共に提案する。

(2) 研究の背景・目的等

2020 年度外国語科では、豊かな文脈の中で思考や表現を取り入れたコミュニケーションを行うことが期待されるが、文脈の中の初出単語の読みが全く推測出来ず暗記になると、英語を難しいと感じる児童が増えることが懸念される。英語を母語とする国でも、英語（国語）の読み書きは他の言語より難しく、子どもへの指導 1 年目の読み書きの成功率は、ドイツ語・イタリア語等では 98%であるのに英語では 33%と低い。初等教育段階の読み書き指導の「質」が脳における読みの認知プロセスにも大きく影響し、その後の英語 Reading 能力を左右する (Joshi, M. 2019)。Joshi は、英語の読み書きには、CMR モデル（認知の方法・動機と興味・学級の雰囲気や環境）が重要であると述べ、しかし、初等教育の教員がその指導法を熟知していないことが課題であると述べている。この問題は日本の英語教育ではまだ議論に上っていない。そこで、本研究の目的は、日本の児童や学校に合った「文字の表記、単語の認識（複数文字がまとまって単語となる）」「文字と音（音素の認識）関係」「文字と読み方の一致」など、音韻認識・音素認識を育てるプロセスを提案することである。

(3) 研究の具体的内容・実施体制等

1) 1 年目の研究で目指すこと

【教材開発・効果検証のためのクイズ作成・公立小学校 A での実践】

フォニックスの様々な指導法と日本での検証結果をレビューし、「音への繊細さ」を育て、Onset（はじめの音）と Rime（終わりの音）を耳で聞き分け、単語の分化と統合のプロセスの指導を実現化するための具体的活動を 15 分×10 回（10P）に作成する。活動で使用する絵・教材・カルタ・音声を準備する。検証方法は、2 種類のクイズ（①音声と意味の繋がり ②読みのレディネス）、フェイスシートに拠る 10P 指導の浸透と児童の興味付けを探る。公立小学校 A での実践を行い、事前と事後の比較・分析を行う。また、①と②の相関や、①の程度による②の違い、日本の児童の「読み書き」の特徴を分析する。英国の小学校での読み書きの様子も把握する（5-7 歳）

2) 2 年目の研究で目指すこと

【1 年目の 10P のフィードバック整理・改善・公立小学校 B での実践・教材の WEB 化】

公立小学校 B での実践と分析を実施する。また、3 種類の教材の WEB 配信を準備する（1、理論・方法・教材、2）2 種類のチャンレンジクイズ、3）初めてのデコーディング絵本）。デコーディング絵本は諸外国で出版されているが、日本の児童の日常生活には馴染みが薄い。そこで、絵本は、10P で学んだ「英語の音と綴りの関係」が閉じられた形で結びつく絵本（closed task）を作成する(Kashiwag&Nakata, 2018)。日本の小学生の日常の話題（友達、給食、校外学習、教科の勉強などのファンタジー）をもちいる。10P の中盤では、児童の気づきや活動中の対話から指導の留意点も明らかにしたい。

3) 研究の実施体制

- ①チャレンジクイズ開発・10Pの開発と指導方法（柏木賀津子）実践と分析（全員）
- ②海外文献レビュー・研究の手続き（鈴木渉・柏木賀津子）
- ③10PWEB化・デコーディング絵本作成（北野ゆき・山下桂世子・柏木賀津子）
- ④実践と分析・イギリスの読み書き指導開始年齢のデータ/質的分析・日英比較（山下桂世子・柏木賀津子）

引用文献

Joshi, M. (2019). The Componential Model of Reading (CMR): Implications for assessment and instruction of literacy problems, In D. Kilpatrick, M. Joshi., & R. Wagner (Eds.), *Reading development and difficulties: Bringing the gap between research and practice 1st ed.* (pp. 1-18). Switzerland: Springer

柏木賀津子・中田葉月(2018). 「音韻認識からはじめる「読むこと」へのゆるやかな5ステップス」『JACET 関西紀要』第20号, 136-155頁

(4) 研究スケジュール

月/年度	2020	2021	
4月	10回パッケージ(10回P)教材完成 10回実践開始	2020年の10Pフィードバック整理と改善 (WEB版)	
5月	チャレンジクイズ完成一事前テスト 10回Pを活用した授業実施(公立A校) 15分×10回 (テストの信頼性検証)	チャレンジクイズ(WEB版)完成一事前テスト 10回Pを活用した授業実施(公立B校) 15分×10回	*チャレンジクイズ事前・事後(評価方法) *C校検討
6月	チャレンジクイズ一事後テスト試行 10Pの1~10段階で活用できる絵やカルタ、教具を完成(WEB版)	チャレンジクイズ一事後テスト 事前・事後テスト分析(児童の興味付け・学級の雰囲気・環境を含む)	0Pの最終ステージで活用できる、初めてのデコーディング絵本を完成(WEB版) (日本の小学校の日)

			常の話題をモチーフに)
7月	研究大会 発表 (⇔10月)	研究大会 口頭発表	
8月	事前・事後テスト 分析(児童の興味付け・ 学級の雰囲気・環境を含む)	10回P教材活用の啓蒙 や研修 フィードバックを得る	
9月	研究大会口頭発表 10Pの実演・指導方法・ チャレンジテスト分析 結果	学会誌論文原稿提出 9月末	
10月	研究大会 発表	10PパッケージのWEB 配信・指導の手引きを 作成(理論と実践方法)	
11月		小学校現場での活用を サポート	
12月	中間報告(課題研究委員 会へ) 12月末	↓	
1月			
2月	イギリスの読み書き開 始前後(5-7歳頃)デ ータ取得・日英比較		
3月		学会誌発行	

(5) 科研費等他の助成金との棲み分けについて

- ① 他の助成金との重複(予定も含む): ない (どちらかを消す)

(なお本様式は、JESのHPに、募集要項とともに掲載します。)